

## はじめに

今回で三回目を迎える「おいでよ！東京」プロジェクト。

福島県にある児童養護施設の子どもたちを東京へ招待し、彼らに笑顔で過ごす夏休みの思い出をプレゼントするこのプロジェクトは、皆様の温かいご支援とボランティアスタッフの方々の力を借りて、8月18日(月)に無事に開催することができました。

福島県内の4つの施設から集まった子どもたちと職員は、総勢50名余り。ボランティアスタッフも80余名と、大規模なイベントになり、笑顔あふれる1日を皆で過ごすことができました。

東日本大震災から3年以上の月日が経ち、少しずつ遠い記憶になりつつあるのも事実です。しかし、未だに福島第1原発周辺では、故郷に帰ることができない人々も多く、復興は道半ばです。施設の子どもたちは、そうした復興途上の中で、最も支援を必要とする存在でもあります。「子どもたちのためにできることを見つけない」との思いから始まったこの企画。

今年もまた、前回、前々回に引き続き、職業体験施設「キッズニア」で学びながら遊び、その後は屋外でミニ運動会を開催。アスリートや外国人などと交流しました。

## ようこそ東京へ！

朝、9時過ぎ。東京・豊洲にあるらぼーと豊洲に到着したバスからは、BLUE FOR TOHOKU のロゴ入りの青い T シャツを着て、やや緊張した面持ちの子どもたちが降りて来ました。2つの施設はバスで豊洲へ。残る2つの施設は、新幹線で東京駅へやってきます。

「おはよう！」というスタッフの掛け声に、照れて顔を隠してしまう子や、むしろ積極的に駆け寄ってくる子など、反応は様々。初年度は反応が鈍かった子どもたちも、3度目を迎えるこのイベントに、少しずつ慣れてきて、笑顔を見せるようになってきました。



豊洲に到着！

今年もまた、子ども一人に一人の大人が1日付き添うことになっています。大人とペアを組むスタイルにも慣れてきたようで、自分と一緒に1日を過ごしてくれる人が決まると、ずっとその傍らに寄りそう子もいます。一方で戸惑ったり、躊躇したりする子もいました。

「おはよう。昨日はよく眠れた？」「何をしたい？」「去年も来ていた子かな」ボランティアスタッフも、初めての人、2回目、3度目の人とさまざまな顔ぶれがあり、子どもとの最初のコミュニケーションに心を配ります。



しっかり手をつないで

施設にいる子どもたちは、虐待やネグレクトなどによって、やむなく親元を離れた場合が多いため、心には様々な傷を抱えているので、なかなか簡単に心を開く子ばかりではありません。目を逸らしたまま、なかなか話をしない子もいれば、逆に手を掴んで放さない子もいます。3度目のボランティアスタッフは、そうした子どもたちの扱いにも慣れてきましたが、戸惑うボランティアスタッフもいて、大人たちもまた、この経験を通して成長をすることが求められます。

## キッズニア ～たくさんの職業にチャレンジ～

子どもと大人のペアができれば、いよいよキッズニアへ入ります。キッズニアはメキシコで始まった、子どもたちの職業体験施設です。およそ 90 種類もの仕事やサービスを体験し、キッズニア内で使うことができるお金「キッズ」を稼ぐことができるのです。2 回目、3 回目の参加となる子どもたちは、去年のキッズを持って来ている子もいます。

「見て！こんなに残っているんだよ」と、去年の残りを自慢する子。また、去年の会場内の案内地図を大切に持っていて、それを広げて見せてくれる子もいます。

「去年は、キッズニアの中で運転免許を取ったから、今年は車に乗るんだ」。そう決めていた小学二年生の男の子。キッズニア内に入ると、地図を見ずにまっしぐらにレンタカーのスポットへと向かいます。「地図を見なくても行けるよ。何がどこにあるか全部覚えているもん」と、自慢気です。去年の「おいでよ！東京」を楽しんでくれた証拠かもしれません。

また、小学二年生の女の子は、資生堂のブースへ行き、お化粧をしてもらうことを楽しみにしていました。体験後にもらったカードが、「いい香りがする」と大喜び。かばんに大切にしまっていて、女性ボランティアスタッフを見つけると「これ、かいてみて。すごくいい匂いがするの」と、嬉しそう。女性ならではの興味を見つけたようでした。

小学一年生の女の子は、伊藤忠商事の「エコショップ」へ行き、石鹸を手作りする体験をしました。好きな形に成形した石けんを大切に持って、集合場所で出会った同じ施設のお兄さん、お姉さんに「わたしが作ったんだよ」と、嬉しそうに見せています。

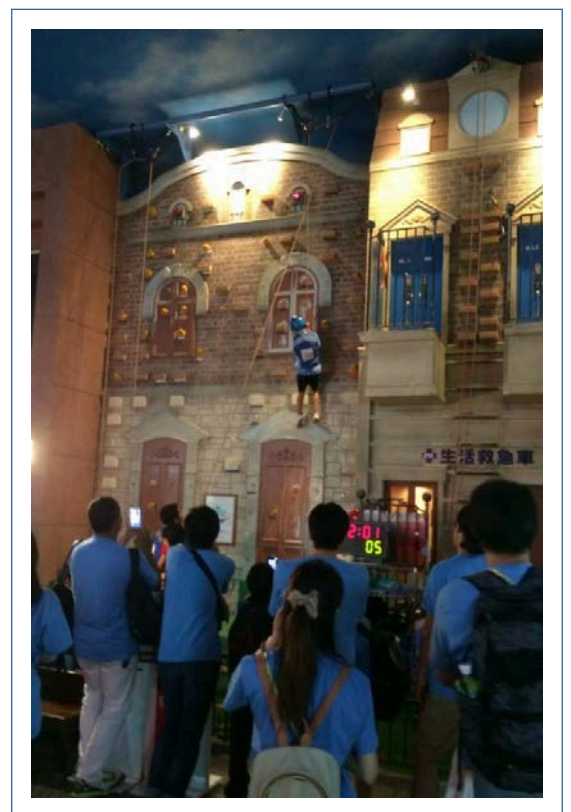
ある小学四年生の男の子は、ジャパンベストレスキューシステムのビルメンテナンスに参加。ヘルメットとベルトを装着して、高い壁をよじ登っていきます。「絶対、できる。余裕だよ！」と気負っていたのですが、いざ登ってみると高いところに緊張して、てっぺんまで届きません。パニックになっているとキッズニアのスタッフから「大丈夫だよ。あと少しだからがんばって」と声がかかります。居合わせた BLUE FOR TOHOKU のボランティアスタッフたちも「がんばれ」と声援を送りました。そして、遂にてっぺんまでたどり着き、無事に降りて来ました。「ボク、思っていたよりも高いところが苦手だったみたい」そう言って、ちょっと困惑した表情を見せていました。新しいことにチャレンジすることで、新たに苦手なものが見つかるのもまた、成長の証拠でしょう。

「今日一日、キッズニアで体験してみて、将来の夢は変わった？」と聞かれた小学二年生の男の子は「警察官になりたいと思っていたけど、パイロットになりたい。パイロットのパビリオンが一番楽しかったから、来年もまたやって、もっと上手になりたい」と嬉しそうに語ってくれました。

未来の楽しい夢に思いをはせる……それこそが、今回の「おいでよ！東京 2014」の一つの大きな目的でもあります。どうやらそれは、今年も無事に達成できたようです。



キッズニアに入場！



壁をよじ登り、降りてくる男の子！

## ミニ運動会 ～かりもの競争で大盛り上がり～

キッズニアを出てから、豊洲公園へ移動した一行は、大きなテントに迎えられます。福田屋さんが設営して下さったテントの下には、冷たいドリンクとバナナが待っていました。株式会社松孝さまからご提供いただいたバナナを見ると、子どもたちは大はしゃぎ。「バナナだ！おなか空いた～」と、すぐさま手に取ります。松孝社長の吉村誠晃さんが、自らバナナの束を被って「エクアドルでとれた美味しいバナナを持ってきました。みんなバナナを食べて大きくなりましょう！」と声をかけると、「もっと食べる！」と、多い子では六本も食べた子がいました。

また、福島県大熊町出身の秋本真吾選手が今年も参加してくださいました。「これから始まる運動会で、みんなが早く走れるように、準備体操をしよう」という掛け声で、ていねいなストレッチやその場ジャンプをし、「全身じゃんけんをやってみよう」と提案。グーは足を縮めてジャンプ。パーは足を左右に開いてジャンプ。チョキは足を前後に開いてジャンプ……と、秋本選手ならではの高いジャンプ力でそれを披露。子どもたちも大喜びでそれを真似します。

さらに、荒汐部屋の力士たちも、今年もやって来てくれました。「四股を踏んで、足腰を鍛えましょう」。そう言って、四股のレッスン。力士の間近で子どもたちは一生懸命、四股を踏みます。

そしていよいよ、かりもの競争。今回は、施設ごとに分かれての競争になりました。コースの中ほどに置かれたバスケットの中には、かりものが書かれています。それは「茶髪の人」「東京に住んでいる人」「外国人」「お相撲さん」「施設のお友達」など、人ばかり。「かりもの競争」ならぬ、「かり人競争です」。「お相撲さん」を引いた子どもは、躊躇なく力士のそばに走って行き、その手を握ってゴールへ。また、「アイリス学園のお友達」を借りるカードを引いた「白河学園」の子は、仲良く一緒に手を繋いでゴール。「かっこいい人」のカードを引いた子どもを見つけたスタッフは「一緒に走ろう！」と自ら名乗り出て、見事にゴール！大人も子どもも大笑いしながらのレースになりました。

かり人競争で優勝したのは白河学園。しかしここで終わりではありません。最後は恒例の綱引き大会。青葉学園といわき育英舎 VS 白河学園とアイリス学園 の2チームに分かれての対抗戦になりました。ボランティアスタッフも混じっての綱引きでは、大人たちも必死です。青葉学園といわき育英舎のチームが2-1で勝ち、優勝は青葉学園になりました。



上)バナナを食べて元気いっぱいになろう！  
下)秋本選手と一緒に準備体操

上)手と手を取り合って、ゴールまで一直線！ 下)呼吸を合わせて、力いっぱい引っ張ります



## 外国人ボランティア ～国際人への一歩～

今年は新たな取り組みの一つとして、外国人ボランティアの方にもイベントに参加していただきました。

施設の子どもたちは、これまでに外国人に出会う機会が少なく、英語もまだ学習していません。そこで「イベントの際に外国人と接することで、中学生になってからの英語学習の一助になるのではないか」と考えました。日本語のできる外国人ボランティアの方々には、キッザニアにも一緒に入場していただき、その後、公園での運動会にも参加していただきました。

アメリカ人のJさんは、子どもたちと一緒にキッザニアに入場。子どもたちは最初、遠巻きに彼を見ているだけで、なかなか近づいて来ませんでした。ただでさえ、人見知りをする子どもが多いので、見慣れない外国人に戸惑っている様子でした。しかし、パビリオンを一緒に回り、お昼でテーブルを囲み、時に日本語で話しかけて下さったことによって、少しずつ壁がほぐれてきます。キッザニアを出る頃には、子どもたちの方からJさんに駆け寄り、「今日は、こんなことをしたんだよ」と、体験した仕事の話などを積極的にするようになりました。運動会のかりもの競争では、子どもと手を繋いで一緒に走るなど、大活躍。

また、大柄な黒人男性 Eさんは、その笑顔が優しいことから、あっという間に子どもたちの人気者に。ぐるりと周りを囲まれて、「手が大きいね。大きさを比べさせて」と、次々に子どもたちが群がり、手の大きさ比べ。またある女の子は「どうして肌の色が違うの?」と、問いかけました。Eさんは「世界には色んな肌の色の人がいるんだよ。白い人、黒い人、黄色い人、茶色い人……」と、ていねいに説明をしてくれます。彼女はその Eさんの話を目を輝かせて聞き、すっかりEさんに懐いてしまいました。

また、キッザニア内で覚えた英語を、早速使って話しかける子どももいました。小さな国際人への一歩を踏み出したようでした。

## お別れのとき

ミニ運動会で優勝した青葉学園には、クリスピークリームドーナツが贈られ、子どもたちは大喜び。他の施設の子どもたちにも、株式会社湖池屋さまから、施設にお菓子が郵送されていることが知らされると、一斉に盛り上がります。また、今年、新たに協賛企業としてキッザニアの入場料を全額負担して下さった伊藤忠商事株式会社からは、伊藤忠記念財団が選ぶ絵本が、各施設 25冊ずつ贈られることが知らされました。

そうしてよいよお別れのとき。楽しかった時間はあっという間に過ぎてしまい、子どもたちは少し無口になり始めます。アイリス学園と青葉学園は、ここから再び電車に乗って東京駅へ。豊洲駅では自分で切符を買う体験をし、そこから有楽町線に乗って有楽町駅まで。そして、有楽町駅から東京駅まではビルの間を見学しながら歩きます。白河学園といわき育英舎は、豊洲公園近くからバスに乗り込みます。

小学五年生の女の子を担当していたボランティアスタッフは、東京駅までお見送り。「やはり学年が上ということもあり、なかなか打ち解けてもらうのに時間がかかりました。楽しんでくれたのか、心配していたのですが、別れぎわに『来年もおいで!』と声をかけると、しっかりと目を見返してくれました。彼女なりに楽しんでくれたようです」

初めて出会う大人に対して、素直に感情を表現できない子どももたくさんいたようですが、一日を一緒に過ごすことで小さな変化は感じられたようでした。

また、バスで見送る小学二年生の男の子を担当していたボランティアスタッフ。帰りが近づくと、さっきまでははしゃいでいた子が、すっかり黙り込んでしまい、スタッフに近づいて来ません。「嫌われちゃったのかな……と心配していたのですが、バスに乗り込んで窓からこちらを見たときに、涙目になっているのを見て、ついこちらもつられて泣きそうになりました。寂しい気持ちを表現できなくて、戸惑っていたのかもしれない」



また来年、会おうね！

## おわりに

参加してくれた子どもたちは、全員、無事に施設に帰ることができました。

「このイベントをずっと楽しみにしていて、前日からどの職業を体験するのか、友達同士で話し合ったりしていたんですよ」と、施設職員の方からの声もありました。子どもたちと、BLUE FOR TOHOKU との間に、少しずつ信頼関係が生まれているようで、私たちスタッフも嬉しくなりました。

今回も、協賛いただいた方々にも現場に足を運んでいただきました。キッズニアの入場料を全額負担してくださった伊藤忠商事株式会社の広報部 CSR・地球環境室の小野博也室長と、後藤麻希子さん、千原恵さん。絵本の贈呈もしていただき、「私たちの企業は、地球の未来を考える会社ですから、未来を担う子どもたちのために協力をしたいと思っています」と、嬉しい言葉を頂きました。ありがとうございました。

参加した子どもたちのみならず、施設に残った子どもたちのためにも、お菓子をご提供いただいた株式会社湖池屋からは、マーケティング本部の小幡和哉さんがいらしてくださいました。「お菓子は人を元気にするものです。だからみんなに笑顔になってもらって、みんなに元気を分けてもらえるように、お菓子を送ります」と、子どもたちにメッセージを送ってくれました。

昨年に引き続き、ユーモアたっぷりにバナナをくれた株式会社松孝社長、吉村誠晃さん。そして毎年、テント設営をし、扇風機ミストなどを設置して下さる福田屋さん。専務の福田和敏さま自らテントを張っていただき、イベントの間も温かく見守って下さいました。

ボランティアスタッフとして参加して下さいました En 女医会のみなさまには、子どもたちの健康管理にも気を配って頂き、無事にイベントを進行することができました。

また、当日、ご参加いただけなかった企業・寄付者の皆様にも感謝申し上げます。

たくさんの方々からのご支援、ご協力によって、「福島の児童養護施設の子どもたちに、未来を思い描く学びの場と、素敵な夏休みの一日をプレゼントしたい」という目的は達成できたと、自負しております。ありがとうございました。

引き続き、今後とも支援を続けていきたいと考えております。そのためには、多くの方々のご支援、ご協力が不可欠です。今後とも、BLUE FOR TOHOKU をよろしく願いいたします。

NPO 法人 BLUE FOR TOHOKU

公式サイト: <http://bluefortohoku.jp>

